

ごあいさつ

平成27年度を迎え、当センターも、私を含め顔ぶれが変わり、新たな体制で始動したところです。

試験研究には、生産現場で直面する課題から消費者の多様なニーズに応えるまで多種多様な課題に速やかに対応することが求められています。

こうした中で、当センターとしては、関係機関と連携し、研究成果の生産現場での実証、普及などに取り組み、農業が希望の持てる産業に変革し、成長産業となるべく、全力を傾けていきたいと考えています。

このような状況を踏まえ、当センターでは、今年度から7つの新たな研究課題に、取り組むことにしています。具体的には、水稻や花などの新品種の育成・開発、有機栽培技術の開発、中山間地域に適した新たな園芸品目の創出、タマネギなどの露地野菜の経営モデルの作成などがあります（P4参照）。また、病虫害防除対策、施設野菜における統合環境制御技術の確立、水稻・麦・大豆の省力栽培技術の確立などには、引き続き取り組んでいくこととしております。

さて、このセンターニュースは、当センターの取組などを、より多くの皆様に知っていただくために、平成25年5月に第1号を発刊してから2年が経過し、今回、第5号を発行することができました。これからも、よりわかりやすい、親しみやすい紙面づくりに努め、当センターの情報の継続的な発信を行ってまいりたいと思いますので、感想や、ご意見などをお寄せいただければ幸いです。

今後とも、皆様のご支援をよろしくお願いいたします。



所長
田崎 博文

平成26年度の試験研究成果として13課題とりました

	試験研究成果情報	対象	研究担当
1	施肥と栽植密度によるトビイロウンカの耕種的防除効果	水稻	有機農業
2	2014年の県内におけるストロビルリン系薬剤耐性イネいもち病菌の発生状況	水稻	病虫害農業
3	本田中後期のトビイロウンカに対するジノテフラン剤の防除効果	水稻	病虫害農業
4	集落営農法人経営シミュレーションソフトの開発	水稻・麦・大豆・野菜	企画経営
5	パン用小麦「ミナミノカオリ」の穂発芽の発生を回避し、生産安定を図るための播種時期	麦	作物栽培
6	多収で抗酸化活性が高い黒大豆新品種「佐賀黒7号」	大豆	作物育種
7	イチゴにおけるナミハダニの各種殺ダニ剤に対する感受性	イチゴ	病虫害農業
8	イチゴ萎黄病菌のポットを介した伝染と効果的消毒法	イチゴ	病虫害農業
9	アスパラガス疫病による若茎の腐敗	アスパラガス	病虫害農業
10	太陽熱処理、BT剤および防虫ネット被覆栽培による12～1月どりキャベツの有機栽培	キャベツ	有機農業
11	冬どりキャベツの有機栽培に適した品種	キャベツ	有機農業
12	宿存がくの連続着生および着色が優れるホオズキ新品種候補「佐賀H5号」および「佐賀H6号」	ホオズキ	花き
13	厳選期出荷作型に適した白色秋輪ギク「神馬2号M選抜」	キク	花き

※成果情報は、当センターのホームページに掲載しています。検索方法は、4頁目を参照してください。

研究成果の紹介

集落営農法人経営シミュレーションソフトの開発しました

営農計画書のデータ等を入力し、法人化後5期間の経営計画を【企画経営研究担当:45-2142】作成できる集落営農法人経営シミュレーションソフトを開発しました。このソフトは、法人と任意組合の比較、運転資金の把握、会計期間や新たな機械導入等のシミュレーションができ、集落営農組合の農家とJA・行政機関の担当者が一緒になって、法人経営を検討することができます。ソフトの入手については、当センターの企画経営研究担当へ、お問い合わせください。

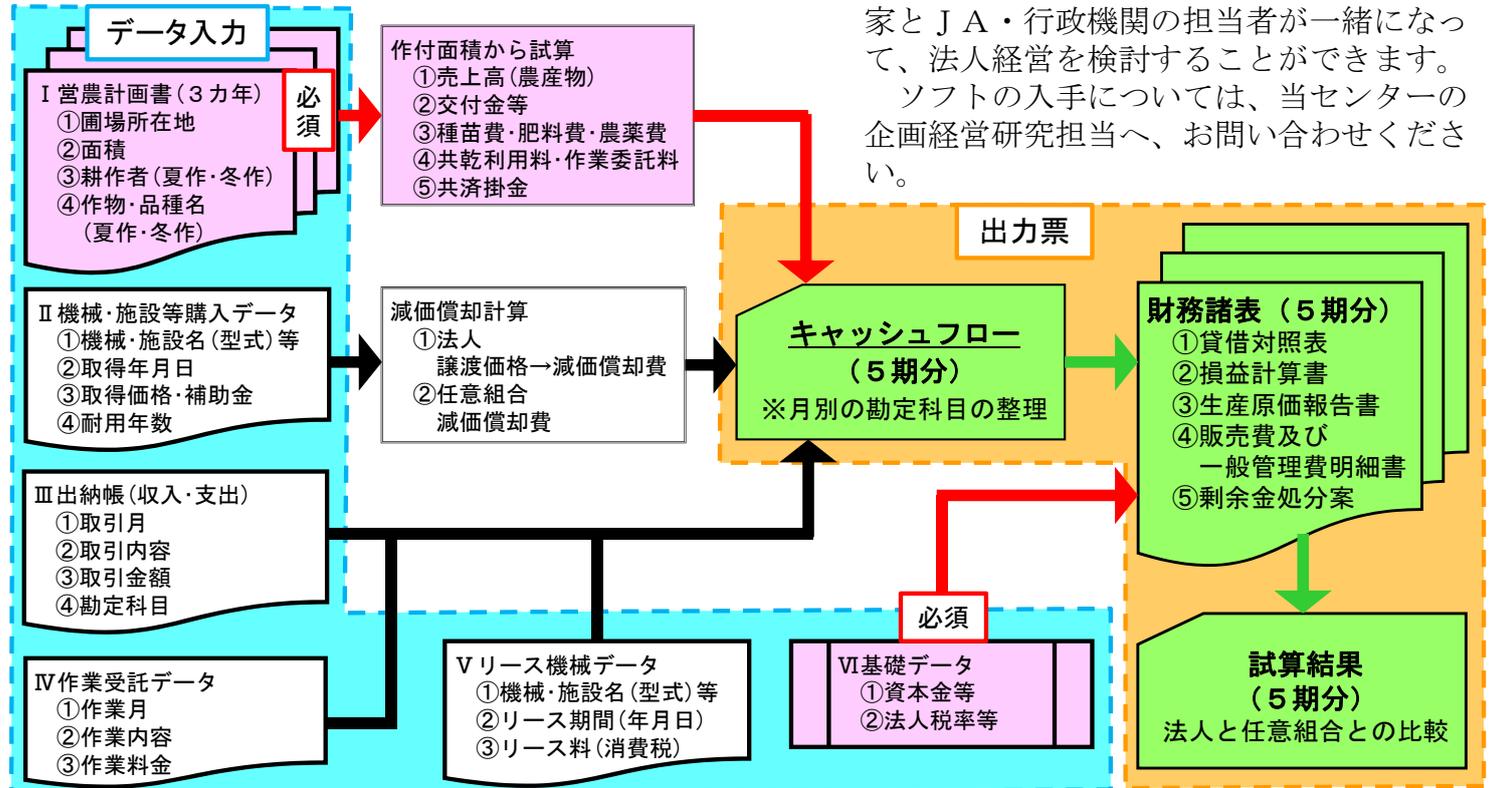


図 集落営農法人経営シミュレーションの入力から試算結果までのフロー図

多収で抗酸化活性が高い黒大豆新品種「佐賀黒7号」

【作物育種研究担当:45-8807】

佐賀県は全国でも有数の大豆産地ですが、オリジナルの黒大豆品種はありませんでした。このたび開発した「佐賀黒7号」は、「新丹波黒」よりも莢付きが良いため1割程度多収です。やや小粒であるため、苗立が良好で安定栽培が可能です。また、枝が広がりやすいので、機械での中耕培土やコンバイン収穫がやりやすく、「フクユタカ」と同じように省力的な栽培ができます。

7月10日播種での収穫時期は11月25日頃となります。

さらに、健康志向が高まるなか、消費者が関心を寄せているポリフェノール含有量が「新丹波黒」よりも多く、抗酸化活性が高いという特徴があります。

用途としては煮豆や枝豆のほか、しぼり豆（甘納豆）、ひき割りにして雑穀米の材料などの利用が期待されています。なお、「フクユタカ」や「むらゆたか」などの黄大豆に混入しないように、これらの品種に隣接したほ場での作付は避けてください。



図1 収穫時期の姿



図2 新丹波黒よりもやや小粒

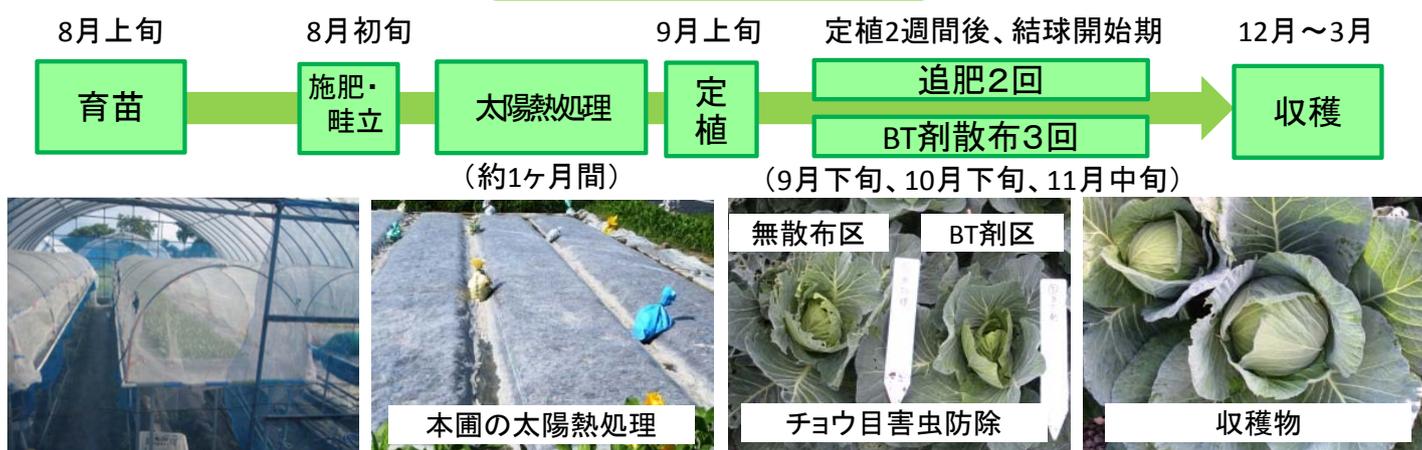
冬どりキャベツの有機栽培体系を開発しました

【 有機農業研究担当:45-8808 】

本栽培体系のポイント

- ①有機栽培体系の実践で3.5～4.5t/10aの収量が見込めます。
- ②有機栽培に適している品種は、「彩風」、「冬藍」、「YR冬武者」、「彩音」、「耐寒大御所」で、これら品種を栽培することで12月から3月までの継続的な収穫が可能となります。
- ③太陽熱処理を施肥・畦立てから定植までの約1ヶ月間行うことで、抑草とネキリムシへの防除効果が得られます。
- ④害虫対策として、育苗期は防虫ネット（0.8mm目合い）をトンネル被覆します。定植後のチョウ目類に対してはBT剤を3回散布し、アブラムシは有機JASでも使用ができる気門封鎖型薬剤で対応します。

栽培体系の流れ



7月の新盆出荷に対応できるホオズキ新品種登場！

切り枝用「佐賀H5号」、実とり用「佐賀H6号」

【 花き研究担当:45-2143 】

訪花昆虫(交配用の蜂等)を放さなくても実着きがよく、着色が早い2品種を育成しました。

両品種ともに、エスレル処理を行うと約3週間で着色することから、7月の新盆出荷にも対応可能です。「佐賀H5号」は実着きが特に良いことから切り枝栽培、「佐賀H6号」は実の形が良いことから実とり栽培に適しています。また、形質も固定できているので、実生栽培ができます。

平成28年度産から本格的に栽培できるようになる予定です！



在来系統 佐賀H5号 佐賀H6号

佐賀H5号



* 実着きが特に良い
➡ 切り枝用

佐賀H6号



* 実の形が良い
➡ 実とり用

	課 題 名	研究 担当	期間
1	攻めの農業実現のための水稲品種の育成	作物 育種	H27 ～31
2	タマネギを主体とした露地野菜複合経営モデルの作成	企画 経営	H27 ～28
3	タマネギの規模拡大に対応した生産安定技術の開発	白石 分場	H27 ～31
4	有機栽培における冬どりキャベツ等の品種・食味向上と土着天敵・コンパニオンプランツの利用による安定生産技術開発	有機 農業	H27 ～30
5	中山間地の新たな特産物になりうる園芸品目の創出	山間 畑作	H27 ～30
6	多様なニーズに対応した佐賀オリジナルのキク新品種開発	花き	H27 ～31
7	新産地形成を目的としたシンテツポウユリ安定生産技術の開発	花き	H27 ～30

タマネギの規模拡大に対応した生産安定技術の開発

佐賀県のタマネギ栽培は、省力機械の導入やインフラの整備が進んでおり、1戸当たりの栽培面積は増加しています。

しかし、機械化が進む中、収量・品質の低下が懸念され、また、最近、急速に被害が拡大している「べと病」の多発は生産コストの増大から規模拡大の妨げになっています。

そこで、全自動定植機に対応した高位生産技術の開発や、「べと病」に対応した生産技術の開発に取り組みます。



移植機による植え付け



ポット苗の状況

《白石分場:84-5169》

野菜育種研究担当の紹介



中島
技術員

岡係長

伊東
研究員

野菜育種研究担当では、主にイチゴやナスの新しい品種を開発しています。これまでに、全国第2位の栽培面積であるイチゴ「さがほのか」や、単為結果性の長ナス「佐賀N1号」、ワケギ「さがゆたか」、同「さが乙女」、サトイモ「福頭」などを品種登録してきました。

現在は、「さがほのか」よりもさらに赤くて糖度が高い果実、収量の多い品種を目標に、「イチゴ次世代品種緊急開発プロジェクト」で選抜を進めています。また、病害抵抗性や低温伸長性、さらに四季成り性や種子繁殖性も視野に、母本の育成を行っています。



ナスでは、単為結果性がより安定し、とげなし性を付加した系統の評価を行っています。

また、放射線の一種であるシンクロトロン光を照射し、突然変異による品種開発の研究も行っています。

発行所

佐賀県農業試験研究センター
(企画情報部 企画経営研究担当)
〒840-2205 佐賀県佐賀市川副町南里1088
TEL 0952-45-2142
FAX 0952-45-8801
E-mail nougyoushikensenta@pref.saga.lg.jp

佐賀県農業試験研究センター

検索

当ニュース記事を利用される場合は、御一報ください。